

市原の「国分寺台遺跡を歩く」

Rev.1 2020年9月27日

2018年2月10日

2017年度の市原市埋蔵文化センターの講座に参加して

我部山民樹

このところ厳しい寒さが続いているが、幸い好天に恵まれ、それほど寒く無い。参加者は40名だ。ほんの一握りでも遺跡を学べてうれしい限りだ。昨年も多少場所は異なるが講座に参加し、記録を残したので、ここでは遺跡の説明は省略し雑感を述べる。

1. 行程

- ① 祇園原貝塚（ぎおんばら）（国分寺中央公園）
- ② 南中台遺跡（みなみなこんだい）（中央消防署前）
- ③ 荒久遺跡（あらく）（国分寺公民館）
- ④ 蛇谷遺跡（へびやつ）（国分寺中学校）
- ⑤ 天神台遺跡（てんじんだい）
- ⑥ 諏訪台古墳群（すわだい）（諏訪神社）
- ⑦ 南田瓦窯跡群（みなみたがよう）
- ⑧ 神門古墳群（こうど）
- ⑨ 中台遺跡（なかで）
- ⑩ 上総国分僧寺跡（かずさこくぶんそうじ）

である。

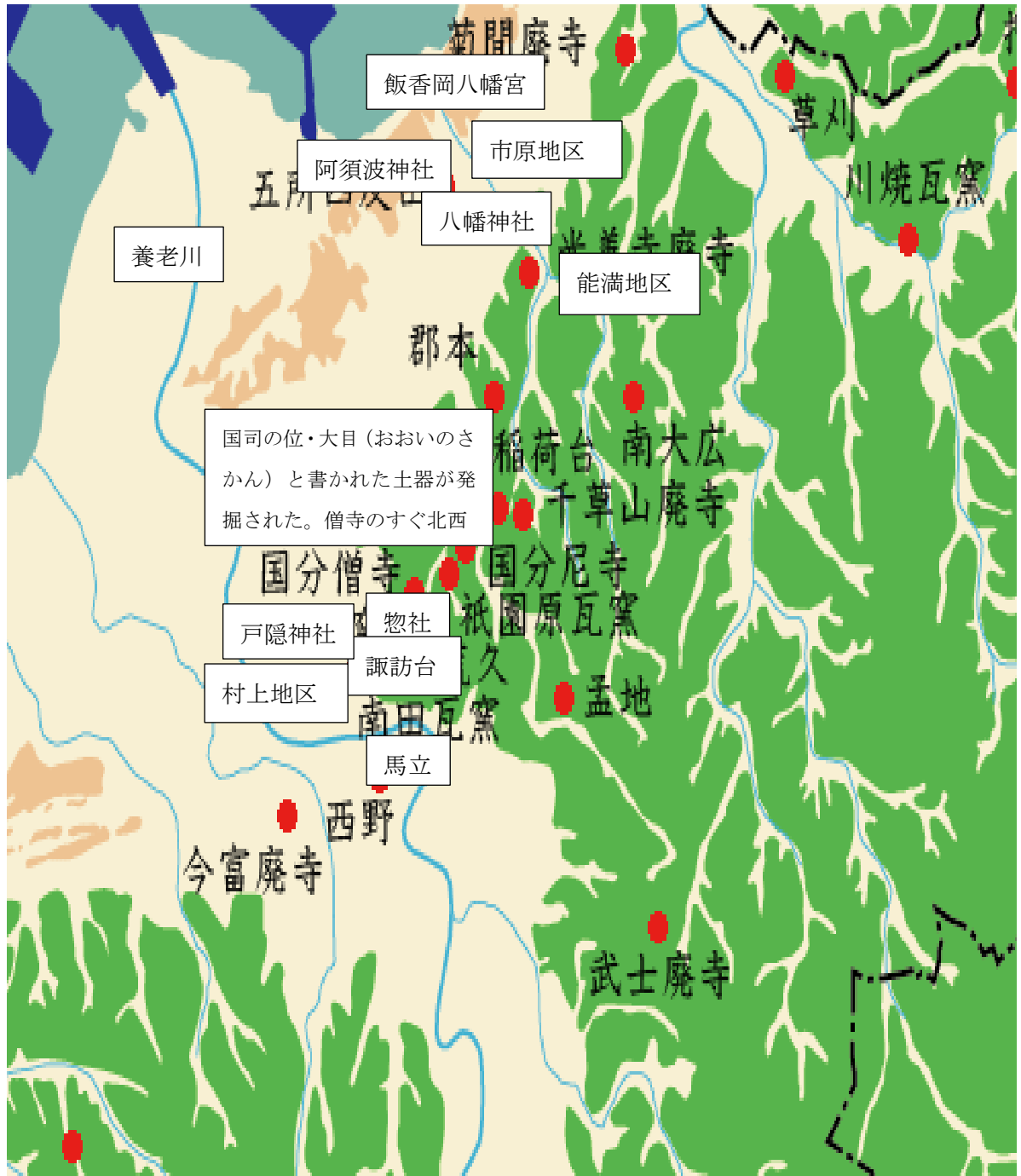
2. 諏訪台古墳群

市内最古の縄文貝塚集落と諏訪神社境内に諏訪台9・10号墳が残っている。10号墳は直径50mの円墳である。縄文時代は13000～2300年前らしいが、貝塚は早期後葉期（8000～7500年前）の集落らしい。表面に出てきた貝殻を踏みしめて進む。



諏訪台10号墳

遺跡地図



諏訪台は国分僧寺の南側に位置する台地にある。今は海岸まで5キロメートル？はあろうが、縄文時代・弥生時代(約6000年前は間氷期で温暖だった)は現在より海岸線も近く、遠浅の干潟であり、貝類をはじめ獲物が豊富で、この地は栄えたのだろう。そして奈良時代以降も栄え、この地に国府がおかれたのではないかと。現在、海岸線は埋め立ててしまっていて工場が乱立している。ここからの景色はなかなかだ。晴れた日には富士山も眺望できる。

東側と西側の海が見渡せる。平安時代の海岸線は戦後の埋め立て前の海岸線とあまり変わらないと思われるが、プラントや排出される煙も無く、さぞかし景色は良かったと思われる。南西側の平地もはるかかなたまで見渡すことが出来る。



「更科日記」の作者一家の仮住まいはここだと思われる。日記に該当するような情景はこの国分寺台付近ではここ諏訪台しか見当たらない。’との説明があった。まことに興味深く納得できた。

後で「更級日記」を調べた。

作者の親は上総国司（上総介）の菅原孝標（すがわらたかすえ）であり、学問の神様・菅原道真の子孫である。作者の名は分かっているが、菅原孝標女（すがわらたかすえのむすめ）と呼ばれる。孝標の兄の定義は学者であり、母の姉（伯母）は藤原道綱の母で「蜻蛉日記」の作者である。作者は文学的環境に育ったサラブレッドである。孝標は上総介の任期終了に伴い、一家は3か月ほどかけて京に帰国した。この時、13歳の作者はこの旅たちから日記を書き始めている。

書き出し部分の現代語訳（埋文センターの資料を引用する）

‘(1020年9月3日に) 門出して、かりに移って来た「いまたち」のすまいは、まわりに塀や垣根もなく、間に合わせの茅葺の家で、しとみ戸（蔀戸）もない。人目をさえぎるために、すだれ（簾）をかけ、幕などを引きめぐらすだけである。南は、はるかに見渡せる。東と西は海が近くて、景色が美しい。あたりに夕霧が立ち込めて趣があるので、まどろむ時間も惜しんで、あちらこちらを見て回っているうちに、ここを立ち去るのもしみじみと悲しく思われたが、同じ月の十五日、あたりを暗くなるほど雨がひどく降る中を、国境を越え、下総の「いかだ」という所に泊った。’とある。

池田利夫氏の著書によると’門出は吉日を選ぶ必要があり、実際に出発したいと思う日と一致しない場合が多い。その時は、ひとまず、佳（よ）い日に家を出て、別の仮屋を設けて移る。’とある。また‘いまたち’は地名と考えるべきだろう。住居があった国府にごく近いと思われるが、今の馬立（うまたち）の辺りとする説も紹介している。馬立は少し南下することになるし、北上して上京するので少し遠廻りではないか？このような情景が見えるの

は北方に突出している高台のようなところと思われるが、馬立にそのようなところがあるのだろうか？諏訪台は確かに情景が合致しているようである。

「いかだ」は千葉市寒川が池田の古名が池田郷であり、該当するのではないかとの説を紹介している。

本住まいの国司館はどこにあったのか？国府の近くだろうが、国府の位置が判っていない。国司館（こくしやかた）は水害に対して安全な高台で且つ国分僧寺の近くにあったという

のが妥当のようだ。高台の国分僧寺のすぐ北西に国司の位を示す・大目（おおいのさかん）の文字の書かれた土器が発掘された。

埋文センターの資料（平成24年）によると、‘国府の位置は二か所が有力。一つは諏訪台の西側にある村上地区説である。諏訪台のすぐ東側に惣社という地名が残っている。惣社は国府の近くに置かれる

ものであり、惣社と村上地区は近いと言える。もう一つは諏訪台の北北東の郡本・市原地区説である。ここに府中日吉神社が残っている。府中は国府のあったところを意味する。また、字名に門前字古甲というのが存在する。古甲は古国府のことである。’と。その他の説もある。

本住まいを門出し、諏訪台に仮住まいしたのなら、そこから牛車で市原地区の古道を北上したと思われる。

上総国府は移転したのだろうか？出羽国や肥後国では国府が移転していることが分かっている。

それにしても、日記を去り行く国府館や父親の仕事場の国府の様子から、書き出してくれていたら、国府の位置確定に役立ったのにと残念に思う。作者は田舎暮らしに興味は乏しく、源氏物語オタクであり、憧れの京に早く帰って源氏物語を読みたいとの思いに期待を膨らませて門出からの日記を思い立ったのだろうか？

今後、上総国府の所在地が解明されることに期待が膨らむ。



国府所在地の諸説

現在、5か所の候補があるらしい。この地では国府が移転し、複数の地に国府が置かれたのではなかろうか？

- ・阿須波神社説 役所や役人の住居から北西に祀られた神社
- ・光善寺と市原説 国分寺創建以前に存在した神社で役所の近くにある。
- ・市原八幡神社説 飯香岡八幡宮の本宮と考えられている。
- ・古甲（ふるこう）・群 古国府（ふるいこくふ）が古甲の地名の由来とする説
本（こおりもと）説 国府（‘こう’と読める）
- ・村上説 全国の国府の近くに惣社がおかれたが、惣社に近い。

阿須波神社：ここからは目の下に館山道の高速道路が見え、厩下に住居と出んほか広がり、遠く五井の工場群が望めます。この神社は「戌亥（いぬい）の社」として、国府などの役所や役人の住居から北西の位置に祀られ、土地や屋敷の守り神だそうです。古代の官道が、この台地へ上って来て社の横を通っています。旅の神様でもあるここで、上総の国府に出入りする人たちが旅の無事を祈ったでしょう。また境内には、防人の万葉歌を刻んだ碑が立てられ、万葉歌神社でもあるのです。

光善寺と市原説：「光善寺廃寺」の地。かつて光善寺は、上総国分寺が創建される前に既に存在していたといわれ、この地方の仏教の中心だったと考えられています。国分寺の創建瓦よりも古い瓦などが数多く出土しており、この寺近くに国衙（役所）があったのでは、と推定地の一つ（市原説）となっています。

また、この地で、県指定の無形民族文化財の「柳橋神事」の出振舞が行われます。やく2キロ先の八幡宿にある飯香岡八幡宮の秋の例大祭に先立つ神事で、室町時代から600年続いているそうです。

市原八幡神社：この神社の氏子総代が柳橋神事を執り行うそうです。柳橋を作り光善寺から市原八幡神社、阿須波神社へと回り、古代道を進んで、途中で一泊し飯香岡八幡宮へ柳橋を届け大祭が始まります。こうした関係から飯香岡八幡宮の元宮であったと、されています。

古甲・郡本説：地名は過去の事象を語ることがあり、古甲は古国府（ふるこう）と読め、古甲地区はかつて国府がここにあったのではと思わせます。高級な陶器類や大型の区画溝などが見つかっており、郡本地区の郡本八幡神社の西側に大きな溝が発見されており、大型の建物があったようで、カワラケも多く出土し、郡の役所があったのではと推定（古甲・郡本説）されているのです。

村上説：養老川の右岸にある小湊鉄道の上総村上駅を中心に広がる地域を推定地に挙げています。この地は、台地の東南の下にあり「惣社」（総社）の地名があります。総社は国府の近くに置かれていること、さらに周囲に溝がある掘立柱の建物群が見ついていることなどから、二人の学者（石井説と須田説）がここを推定地にあげています。

3. 神門古墳群

神門5号墳は西側に突出部を持つ全長38.5mで、剣・鉄鏃・ガラス玉などが出土している。3世紀後半（古墳時代初期）に造られた。構造が前方後円墳の先駆けとも言われているらしい。突出部や前方は祭壇説もあるが、諸説ある。

東の纏向型前方後円墳と言われているらしい。纏向古墳は 3 世紀初頭に築造されたと言われている。後に造られた神門 3 号墳が纏向型前方後円墳の先駆け？混乱してくる。

古墳時代はいつからか？箸墓古墳以降が古墳時代の始まりとする説が有力だ。卑弥呼の墓説が有力だ。卑弥呼は 238 年頃死去したと伝わる。

現場の看板には 5 号墳は 3 世紀前半に造られたとある。遺跡の解析が進み、築造時期の見方が変わったのか？

- ・纏向型前方後円墳は 3 世紀初頭
- ・箸墓古墳は 3 世紀中頃築造された前方後円墳
- ・5 号墳は 3 世紀後半に築造されて、前方後円墳の過渡期？
- ・3 号墳は 5 号墳の後で築造、東の纏向型前方後円墳？
- ・纏向型前方後円墳はいつ造られたのか？短期間で、どのようにしてはるか市原まで伝わって来たのか？埋葬者は中央政権と強いつながりがあるのか？



後で箸墓古墳と卑弥呼について調査した。

4. 箸墓古墳（を調べる）

箸墓古墳は最古の前方後円墳と言われ、全長 280m の巨大な墳墓である。宮内庁の管轄下であり、発掘調査は出来ないが、周辺の土器中の放射線炭素 14 の年代測定で西暦 250 年頃築造されたことが分かった。魏志倭人伝に卑弥呼が 248 年頃に死去したと記述がある。

魏志倭人伝

魏志倭人伝は、中国の歴史書『三国志』中の「魏書」第30巻烏丸鮮卑東夷伝倭人条の略称。当時、日本列島にいた民族・住民の倭人の習俗や地理などについて書かれている。 [Wikipedia](#)

1. 倭人について

倭人は、(朝鮮の)帯方(郡)(魏の朝鮮支配の拠点、黄海北道沙里院付近か、京城付近)の東南の大海のなかにある。山(の多い)島によって国邑(国や村)をなしている。もとは百余国であった。漢のとき(中国に)朝見するものがあった。いま、使者と通訳の通うところは、三十か国である。

2. 狗邪韓国

(帯方)郡から倭にいたるには、海岸にしたがって水行し、韓国(南鮮の三韓)をへて、あるときは南(行)し、あるときは東(行)し、倭からみて北岸の狗邪韓国(弁韓・辰韓など十二か国の一つで、加羅すなわち金海付近)にいたる。

3. 対馬国

(帯方郡から)七千余里にして、はじめて一海をわたり、千余里で対馬国にいたる。その大官を卑狗(彦)といい、副(官)を卑奴母離(夷守)という。いるところは絶島(離れ島)で、方(域)は、四百余里ばかりである。土地は、山けわしく、深林多く、道路は、禽と鹿のこみちのようである。千余戸がある。良田がない。海(産)物をたべて自活している。船にのり、南北に(出て)市糴(米をかうこと)をしている。

4. 一支国

また南に一海をわたること千余里、名づけて瀚海(大海、対馬海峡)という。一大国(一支国の誤り。壹岐国)にいたる。官(吏)をまた卑狗(彦)といい、副(官)を卑奴母離(夷守)という。方(域)は、三百里ばかりである。竹木の叢林が多い。三千(戸)ばかりの家がある。やや田地がある。田をたがやしても、なお食に不足である。(この国も)又南北に(出て)市糴している。

5. 末盧国

また、一海をわたる。千余里で、末盧国(肥前の国、松浦郷)にいたる。四千余戸がある。山が海にせまり、沿岸にそって居(住)している。草木が茂りさかえ、行くに前の人をみない(前の人が見えないほどである)。(住民はよく魚や鰐(あわび)を捕える。水の深淺をとわず、みな沈没しこれをとる。

6. 伊都国

東南に陸行すること五百里で、伊都国(筑前の国、怡土郡)にいたる。官を爾支(にぎ)といい、副(官)を泄謨觚(しまこ)・柄渠觚(ひここ)という。千余戸がある。世々王がある。みな女王国に属している。(そこは帯方)郡使が往来するときつねにとどまるところである。

7. 奴国

東南(行)して、奴国(筑前の国、那の津、博多付近)にいたる。百里である。官を兕馬觚(しまこ)という。副(官)を卑奴母離(夷守)という。二万余戸がある。

8. 不弥国

東行して不弥国(筑前の国、糟屋郡の宇瀾、いまの宇美町付近)にいたる。百里である。官を多模(玉または魂)といい、副官を卑奴母離(夷守)という。千余戸がある。

9. 投馬国

南行して投馬国(とまこく)にいたる。水行二十日である。官を弥弥(耳)という。副(官)を弥弥那利(耳成・耳垂か)という。五万余戸ばかりである。

10. 邪馬台国

南行して、邪馬壹(臺の誤り)国(やまとこく)にいたる。女王の都とするところである。水行十日、陸行一月である。官に伊支馬(いきま)がある。次(官)を弥馬升(みまと)という。(その)つぎを弥馬獲支(みまわぎ)といい、(その)つぎを奴佳鞮(なかつ)という。七万戸ばかりである。

1. 女王国より以北

女王(王の誤り)国より以北は、その戸数・道里は略載するを得べきも、その余の旁(わきの)国々は、遠絶(とつ)して、つまびらかにしようとしてもできないことである。

纏向古墳が卑弥呼の墓説に時期的には合致している。更に近くの纏向に 2000m × 1500m の広大な都市の遺跡が発掘された。ここには 19m × 12m ほどの大型建築物の遺構も発掘された。‘ここが邪馬台国であり、女王卑弥呼がこの宮室に居

住し、死去後、箸墓古墳に埋葬された。’
との説に説得力を感じる。魏志倭人伝には卑弥呼が全長 120m 位の墓に埋葬されたとあるので、墳墓の大きさから纏向勝山古墳が卑弥呼の墓とする説もある。その他諸説が入り乱れていて、いまだに決定打が無いようだ。



纏向遺跡内に所在する主な遺構

辻地区の建物群（桜井市大字辻）

（ほったてばしらたてもの）

辻地区において検出された掘立柱建物と柱列からなる建物群で、纏向遺跡の居館域にあたと考えられています。建物群は庄内式期の前半頃（3世紀前半）に建てられたとみられますが、庄内3式期（3世紀中頃）を含めてそれ以前には柱材の抜き取りが行われ、廃絶したと考えられています。このうち、中心的な位置を占める大型の掘立柱建物は4間（約19.2m）×4間（約12.4m）の規模に復元できるもので、当時としては国内最大の規模を誇ります。近年実施された纏向遺跡第168次調査では建物群の廃絶時に掘削され



建物群復元案

（C）NHK／タニスタ 監修：黒田龍二

どこ
たとみられる4.3m×2.2mの大型土坑が検出され、意図的に壊された多くの土器や木製品のほか、多量の動植物の遺存体などが出土しており、王権中枢部における祭祀の様相を鮮明にするものとして注目されています。

5. 卑弥呼（を調べる）

卑弥呼は2世紀末頃（189年頃？）に女王に共立され、およそ80歳の248年頃に死去。凡そ60年ほど女王として君臨した。死因は老衰説が多数だが、日食は（247年3月24日と248年9月5日が確認されている）を予見できなかったことで、シャーマンと



としての能力を疑われ、暗殺されたとの説もある。さらに暗殺者は弟と唱える人もいる。卑弥呼は誰とも会わず、ほとんど弟だけに会い、弟に仲立ちさせていた。暗殺説を完全に否定は出来ないと思う。魏志倭人伝（埋文センター資料）に‘倭国はもと男子を王としていた。男王のもと、70～80年すると、倭国は乱れて、互いに攻撃しあうことが何年も続き、そこで一人の女性を立

てて王とした。名を卑弥呼という。鬼道（巫術、妖術）を行い、よく人々を眩惑した。’ とある。

卑弥呼が女王として共立される以前は 20～50 年に亘る天候不順があり、食料不足となり、食料の奪い合いで倭国は乱れて、国々間の争いが何年も続いた。2 世紀頃の鳥取県の青谷上寺地（あおやかみじち）遺跡を発掘したら、骨まで傷を負った男性や女子供までの人骨が見つかった。食料を略奪するために侵略し、反撃を恐れて鉄製の武器を使って皆殺しにしたのか？

青谷上寺地遺跡（あおやかみじちいせき）は、鳥取県鳥取市青谷町（あおやちょう）にある弥生時代（やよいじだい）を中心とする遺跡です。道路建設（どうろけんせつ）をきっかけに1998年に始まった発掘調査によって、弥生時代前期終わりごろ（約2200年前）から古墳時代（こふんじだい）初めごろ（約1700年前）にかけて、この場所にムラが営まれていたことが分かりました。これまでの調査で、ムラのまわりに掘（ほ）られた大きな溝（みぞ）や水田の跡が発見されたほか、数万点もの遺物（いぶつ）が出土しました。

何故、卑弥呼が共立されたか？他にもシャーマンはたくさんいたはずだ。巧な魔境の使い手で、鬼道ができたからだろうか？大陸との交易に積極的で、政治家としても優れていたからか？あまりにも謎が多くて、興味は尽きない。

卑弥呼の墓が古墳？

弥生の年代修正の影響は、邪馬台国論争で畿内説が極めて有力になったというだけに止まりませんでした。
弥生時代に対する近畿地方の年代変更が行われた結果、思いがけない事態が発生しました。古墳時代の始まりと、卑弥呼の死亡時期が接近し、卑弥呼の墓が古墳である可能性が強まってきたのです。
卑弥呼の墓が古墳！
まったく、びっくりするような話になってきました。

6. 祇園原貝塚の出土品

縄文時代後期（6000 年位前？）の貝塚。

祇園原貝塚は縄文時代後期から晩期にかけての遺跡です。現在の市役所の東側に位置し、総国分尼寺の下層にあたります。
発掘調査では、竪穴住居跡51棟などの遺構と遺物包含層が検出され、それらから大量の縄文土器、土製品、石器が出土しています。
検出された貝層は竪穴住居跡などのくぼみに形成されたものをのぞけば密度は低く、全体的に薄い堆積です。これは、おそらく奈良時代に上総国分寺を建立する際に大規模な整地がおこなわれたためでしょう。
整理作業の結果、縄文時代後期から晩期にかけての集落の変遷や埋葬形態の多様性を把握できるなどの成果が上がり、また、貝層サンプルの分析から当時の食生活の一部を明らかにすることができました。
なお、祇園原貝塚の近くには、柄鏡形住居を検出した北野原遺跡や、ほぼ同時期に形成された西広貝塚もありますので、これらを比較することで興味深いことがわかるかもしれません。

貝に加えて動植物、鳥類の骨（化石？）、また人骨が発掘されている。動物は猪や鹿が主だが、ネズミや蛇の骨も出た。魚の種類も豊富だが、鯛や平目の骨もでた。‘現代人は養殖を食べているが、この時代は天然ですからね。縄文人は我々よりグルメです。’と説明がある。以前、‘火の無い時代、椎の実の苦みを取り除くために水に晒していた。それで海岸から遠くても大量の水のあるこの台地に居住したのか？海の幸は養老川を利用して丸木舟で運んでいたようだ。川べりから綱で引く程度の船だろうが。’と講座で聞いたことが有る。

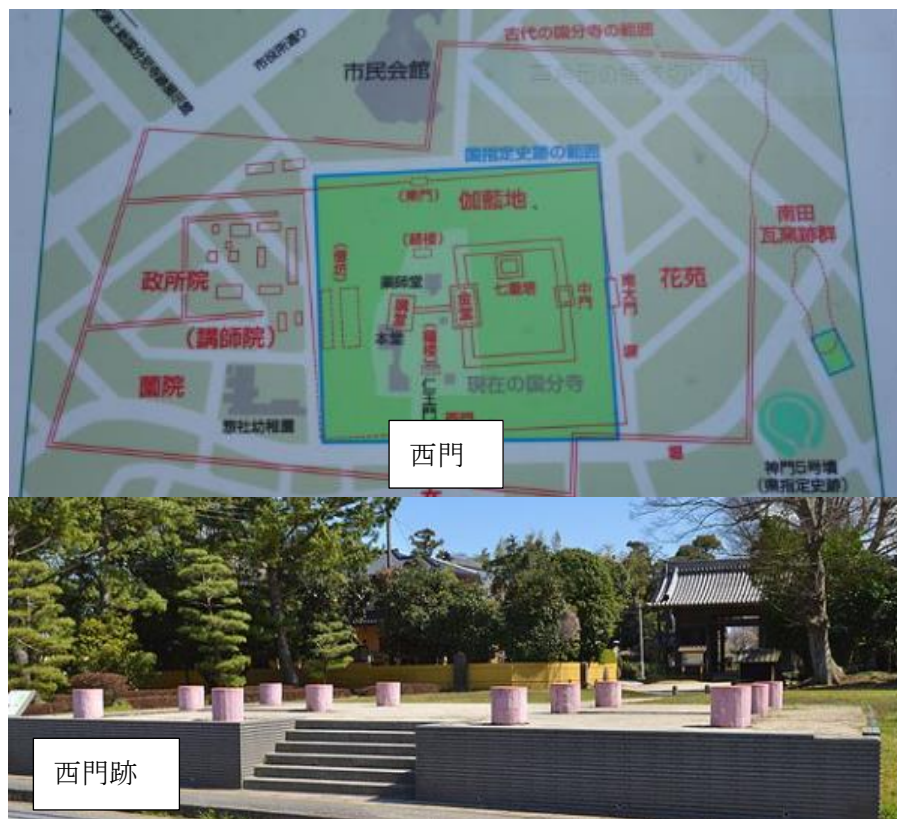
また、‘どこかの貝塚の人骨を DNA 鑑定したら、縄文系、弥生系、南方系が入り混じっていた。’との説明を聞いた記憶がある。日本は酸性土壌なので、骨が溶けてしまうが、貝塚はアルカリ性なので、骨が残っている。市原を含めた全国の遺跡を時代ごとに発掘された人骨の DNA 鑑定をすれば、民族の移動が解明できるのでは？期待が膨らむ。

最近、‘DNA 鑑定が進んでいて、縄文人は北方系の DNA が見つかったという研究者がいる。’とのテレビ番組を見た。今後の解析が期待される。（後日、DNA の解析結果から縄文人は中国や韓国系とは DNA が異なり、北方系と一致するとの報道を見た。）

7. 上総国分僧寺

上総国分僧寺跡は寺城の面積が 13.9 万 m² に及ぶ広さで、全国でも最大規模の国分僧寺と分かる。

西門跡を発掘し、柱の位置を再現している。

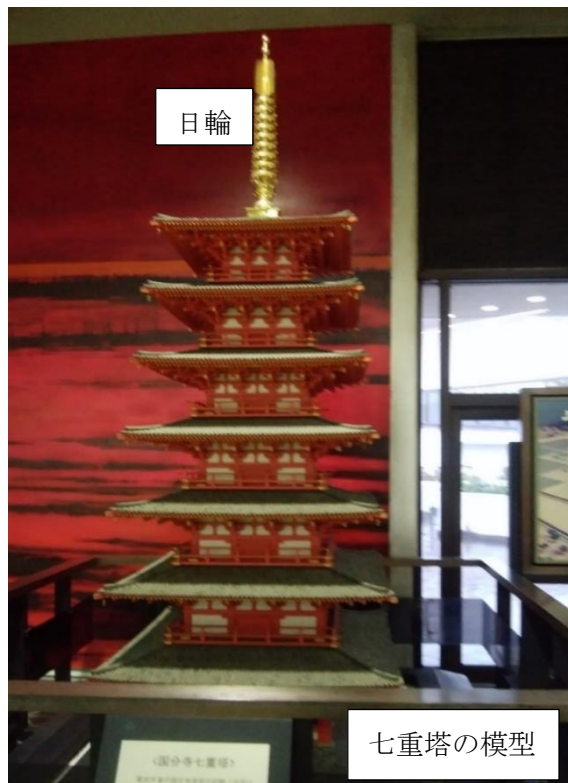


奈良時代、(天平 13 年 3 月の) 聖武天皇の詔 (みことのり) により建立された。(別資料の聖武天皇の詔には ‘人々の幸福を願い、諸国に国分寺を建立しようと思った経緯が述べられている。そして七重の塔を一基建立すること。’) 僧寺の近くに、七重塔の礎石がその位置で現存している。内房の金谷の鋸山(のこぎりやま) の石だそうだ。ここまでどのようにして運んで来たのか？

別資料によると、礎石から建築学的に類推すると日輪まで含めて 60m 程の高さらしい (東寺の五重の塔の高さが 54.8m)。

七重塔を是非見たいと思いながら、ひょっとして、礎石を設置した段階で、何らかの理由で中止となり、塔は建設しなかった可能性は無いのかと余計なことを思ったりする。塔の瓦等は見つかっているらしいが、塔建立の決定的な証拠があればと思う。

七重塔が国内に現存していないのは承知しているが、60mほどの高さの見事な塔を是非見たいと思いながら、後で市庁舎にある 30 分の 1 の復原模型を見た。



上総国分尼寺(後日訪問)

奈良時代（聖武天皇）の 753 年頃に完成したと言われています。（752 年に奈良東大寺の大仏が完成）

しせきかずさこくぶんにしあと かずさのくに
史跡上総国分尼寺跡は、市原市が古代上総国の政治、文化の中心地であったことを象徴する歴史的文化遺産です。
市では、この貴重な文化遺産を後世に伝え、ふるさとの歴史や文化を見直し体験できる場として史跡の整備を平成2年度から進めてきました。

ちゅうもん こんどう かいろう
中門が5年度に復元公開され、そして中門と金堂を結ぶ復元回廊が、平成9年度装いも新たに現代によみがえりました。

しせきかずさこくぶんにしあととんじかん
また、その一角には史跡上総国分尼寺跡展示館が平成5年度に開館しております。



上総国分尼寺の模型



復元された上総国分尼寺



復元された上総国分尼寺の回廊

以上